慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 由谷裕哉編著『郷土再考 : 新たな郷土研究を目指して』角川学芸出版、2012年
Sub Title	
Author	阿南, 透(Anami, Toru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.188- 192
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 由谷裕哉編著『郷土再考』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：由谷　裕哉編著

『郷土再考―新たな郷土研究を目指して』角川学芸出版、2012 年

阿南　透

本書は、さまざまな専門分野の 14 名が論考を寄せた論集である。

本書の意図については、編者による「はじめに」と「あとがき」に触れられている。それによると本書の成り立ちは、編者が時枝務との共編著『郷土史と近代日本』（角川学芸出版、2010）を上梓した際に、「郷土史の対象である郷土についての考察が同書で充分でなかったのでは、と編者として感じたことがきっかけであった」という。そこで、宗教文化のローカリティについての共同研究を手始めに、日本民俗学会、日本宗教学会、日本山岳修験学会等でメンバーが口頭発表したり、情報交換したりして本書を作り上げていったとのことである。このため、「特定のスクールや枠組みに依拠した論集ではない」とはいうものの、宗教に関心を持つ民俗学者を中心にした論集というのが評者の本書に対する第一印象である。

しかし、キーワードである「郷土」について、執筆者に共通理解や、概念規定の共有があるわけではない。編者によれば、郷土はコミュニティのように分析概念として創案された語ではなく、ドイツ語で日常的に使われる Heimat の翻訳語と考えられ、また当事者の観念や認識によってその範囲に大きな違いが生じる。そこで、「当事者によって幅のある語としての郷土」（p.10）について、「ここで性急に郷土という語の概念規定をしてしまおうとは考えていない」（p.9）。つまり「郷土」は、当事者にとって幅のある語であるため概念規定をせず、「当事者の観点を踏まえて郷土を再考する」（p.10）ことを目的とするというのだ。このため、収録論文に「郷土」の概念を主題として取り上げた論考は少ない。結論部に申し訳程度に言及しただけの論文、「地域」を「郷土」と言い換えただけの論文、さらには「郷土」の語がまったく出てこない論文すら見られる。このあたりは問題意識の共有よりも個別の関心を、また地域の事情を優先したのであろう。そこで、地域・民俗研究論集と読めなくもない本書において、「当事者の観点」がどのように扱われているかを念頭に置きながら、個々の論文を紹介することにしよう。

3 部、14 章からなる本書は次のような構成である。

第 1 部　郷土意識、郷土愛の形成

第 1 章　多胡碑と渡来人のフェイクロア―郷土史をめぐる文化政治学（佐藤喜久一郎）

第 2 章　新田義貞をめぐる歴史叙述と顕彰運動―新田神社の別格官幣社昇格運動を中心として（市田雅崇）

第 3 章　高山神社の成立―郷土意識の形成と神社・序説（時枝務）

阿南透「書評：由谷裕哉編著『郷土再考』」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）188-192 頁

第 4 章　秩父の象徴「武甲山」―開発と再生の歴史をめぐって（西村敏也）
第 2 部　郷土文化のダイナミズム
第 5 章　戦後における高尾山の観光開発―京王電鉄との関連を中心に（乾賢太郎）
第 6 章　真宗の土徳と郷土の形成―柳宗悦と城端別院善徳寺の関わりから（本林靖久）
第 7 章　真宗村落における祈禱儀礼の継承―津市周辺の真宗高田派のムラを事例として（亀﨑敦司）
第 8 章　百万遍行事の継承―三地区の合併（石本敏也）
第 9 章　大隅正八幡宮の放生会―祭の復興と地域の活性化（吉田扶希子）
第 3 部　郷土・国家・グローバルな世界
第 10 章　祭事を支える人びとの志向性―重要無形民俗文化財「阿蘇の農耕祭事」をめぐって（柏木亨介）
第 11 章　小盆地宇宙の神々と信仰―郷土史研究における神社の諸伝承の考証・再整理をめぐって（藤本頼生）
第 12 章　本来の祭りの行方―和歌山県新宮市「お燈祭」に関わる言説の競合をめぐって（天田顕徳）
第 13 章　帝都と郷土―曹洞宗大本山総持寺移転と能登門前（由谷裕哉）
第 14 章　郷土をめぐる主体なき記憶―奄美・喜界島における民俗信仰の過去・現在・未来（及川高）

第 1 部のうち 3 論文は、近代の群馬県における伝説や神社の創建を扱う。「郷土」の語が頻出する点でも、本書の主題を最も反映しているのが第 1 部であると読める。

第 1 章は、群馬県における羊太夫伝説をめぐる近代の言説のせめぎあいを扱ったものである。羊太夫とは『神道集』を初出とする伝説上の人物だが、群馬県にさまざまな写本や「遺跡」が残る。ここでは羊太夫の「渡来人」イメージや、製銅技術を導入したという文化起源説話、さらには実在したかどうかをめぐって繰り広げられた郷土史家たちの、また中央の学者との論争を分析する。そして実在を主張して「フェイクロア構築に向かう郷土史家」たちの、中央の権威に対する劣等感や不満感が、「郷土史という名のフィクション」を作り上げたと指摘する。「郷土」をめぐる言説のせめぎ合いや、「郷土史」の性格を鮮やかに描き出した点で、本書の巻頭を飾るに相応しい出色の論考である。また、近代において宗教者に代わって郷土史家の発言力が増したことや、背景となるナショナリズムにも複数のタイプがあることなど、興味深い指摘が見られる。さらに、副題に掲げた「文化政治学」については説明がないが、従来は「文化の政治学」とされてきた内容であろう。独自の学問領域へ発展していくのか、続編が待たれる部分である。

第 2 章は、新田義貞を祀る新田神社の別格官幣社昇格運動を中心に、群馬県の近代における新田義貞顕彰運動がどのように形成され、地域に働きかけられたかを扱う。上毛郷土史研究会

の郷土史家の論説に重点を絞って分析した点が本章の特徴であり、その点ではよくまとまった論文であるが、著者も認めるように、運動の地域社会への展開が課題として残された感がある。

第 3 章は、高山彦九郎を祀る高山神社の創建運動を取り上げる。高山神社は明治 12 年に群馬県太田市に創建されたが、明治元年から 12 年までの運動の担い手の変化を分析し、群馬県が寄付金を募集して上からの郷土意識（県民意識）の形成を進めたことを重視している。しかし「少なくとも昭和戦前期まで書き進めないと、郷土との深い関係はあきらかにできない」という予告で終わってしまうのが惜しい。

第 4 章は一転して現代を対象とする。埼玉県秩父市の武甲山が秩父に住む人々にとって持つ意味を、信仰・生活の山から環境・社会問題を語る象徴への移行として把握した論考である。ここで武甲山は「秩父という郷土の問題に止まらず、より広い地域の人々を巻き込んでの象徴と化している」という結論に至るのであるが、これは武甲山の保全を問題とするならば妥当な結論である。「本稿で取り上げることができなかった様々な動きがまだ、多くあ」るとのことなので、ぜひ広い地域に目を向けて研究を進めていただきたいものである。

第 2 部は「郷土文化のダイナミズム」と題して 5 編を収録するが、ここでは郷土史家の活動や郷土の概念を主題として扱うのではなく、地域の民俗や宗教の変容を扱った論考が並ぶ。第 5 章は、戦後の高尾山の観光開発を京王電鉄の動向に焦点を当てて分析した好論である。確かに地域の動向にも触れているものの、鉄道史の論考という印象がなくもない。

第 6 章は、富山県南砺市城端の善徳寺と柳宗悦の交流を論じる。柳宗悦が僧侶たちに与えた影響はよく理解できるが、「郷土の形成」を章題に掲げるなら、地域への影響をもっと具体的に述べて欲しかったものである。

第 7 章は、三重県津市の真宗村落において、大般若祈禱など真宗の教義とは相容れない行事が行われている理由を歴史的に考察する。確かに説得力のある論文なのだが、最後に近年の動向に触れ、テレビや新聞に取り上げられるなど外部からの働きかけによって希少性が見直されて「住民たちの間に郷土という視角を提供し、大般若を受け継いでいく新たな動機づけとなっているようにも思われる」と述べる。ここで唐突に登場する「郷土という視角」がいつどのように成立したのか、現代に特有のものなのか、これ以上の言及がないのが惜しまれる。

第 8 章は、新潟県東蒲原郡阿賀町五十島において、三集落の百万遍行事を合併するに際しての、推進側と反対側の言い分を丹念に分析したものである。また、結果的に行事は合併するのであるが、合併以前の姿が意図的に残された部分を細かく指摘し、そこに働いた配慮にも着目している。さらに水害の経験や運動会との対比などにも目配りし、「集落の物語が受け継がれること」の重要性を述べている。緻密な調査に基づいた好論である。

第 9 章は、鹿児島県霧島市の大隅正八幡宮において 65 年間の中断を経て復興した放生会を取り上げる。論文は復活した行事内容の詳細な記述が中心であり、また住民の海への関心が高まって NPO 法人の設立まで発展したという。それはいいのだが、ここで実行委員会を結成して祭りを行っているのは誰なのか、宮司以外の人々について説明が見あたらない。氏子組織はな

いとのことであるが、誰が何のために参加しているのか、「当事者」の実態を示して欲しかった。

第3部は「郷土・国家・グローバルな世界」と題し5編を収録するが、世界遺産の指定問題以外にはグローバルな論点はなく、国の政策の地域への影響が中心的に扱われている。第10章は、重要無形民俗文化財に指定されている「阿蘇の農耕祭事」について、中世から現代に至る社会的位置づけの変遷を取り上げる。そこでは阿蘇神社をめぐる社会状況や政策の変化を中心に、担い手と目的が刻々と変化してきたことが簡潔にまとめられている。更に今後は世界文化遺産選定に向けて「グローバルな価値観が組み込まれていくことになるだろう」という見通しで終わる。「郷土」の語は使わず、「阿蘇谷に暮らす人びと」にとっての祭事の意義を長期的に把握し、スケールの大きな視点の下にまとめた好論である。

第11章は、岡山県津山盆地における神社の由緒をめぐる諸説を整理し、再検討の必要性を呼び掛けたものである。ただし章題に掲げた「小盆地宇宙論」（評者には大変懐かしい）については、説明以上の論評は意図されていない。これは評者の無い物ねだりであるが、米山俊直は日本文化の地域的多様性を強調する意図を持って用いていただけに、本書が郷土再考を標榜するならば、単なる枕詞に終わらせてしまったのは残念である。

第12章は、和歌山県新宮市の神倉神社のお燈祭において、神社と参加者の言説の間で見られる「本来の祭り」をめぐる言説の相違を取り上げる。この祭りに限らず、参加者の立場によって祭りの意味付けが異なることは周知のとおりだが、多様な意識を多様なまま把握する方法について祭礼研究者は試行錯誤をしてきた。具体的なエピソードに注目する方法もあり、その点では、参加者の人数制限に注目した著者の着眼点と方向性は評価できるものの、まだ十分なデータを集めるには至っていないように思える。ぜひ続編を期待したいものである。ただ、神社祭礼において「主催者」という表現を用いる点は気になった。

第13章は、明治44年に起こった石川県能登から横浜市鶴見区への総持寺移転を取り上げる。移転推進派と反対派の言説を検討し、特に能登門前町での移転派に対する評価について検討を加えている。

第14章は、奄美・喜界島における「民俗信仰」を取り上げる。かつて存在したはずのノロ信仰が断絶し、聖地が神社となって石塔の前に鳥居が建てられている現状を前に、「国家と郷土という関係性とは異なる構図が必要」として、方向性を示唆的に説明して終わる。「神社の異様な景観」に着目するなど、論文としての完成度はともかく感性の鋭さが感じられる。

このように本書は、地域・民俗研究論集としては、著者たちが精緻な調査によって、当事者の観点を含む「フィールドからの視点」を描きだした点で、一定の成果を挙げたと見ることができる。また、宗教や祭りが中心的な主題となってはいるものの、そこにとどまらず運動会、写真展、地域キャラクター、世界遺産、土建業者、海の浄化運動、NPO、マスコミの取材など、宗教以外の新しい現象に目配りすることで説得力を増している。現代社会における宗教研究、民俗研究の方向性を示すものとして積極的に評価しておきたい。

なお、本書ではそれぞれの著者が地域とどのように関わってきたのか、本文中にはほとんど

言及がない。学術論文を志向するならば当然かもしれない。しかし「当事者の観点」への着目を標榜するのなら、著者自身の地域との関わりや当事者性、あるいは各著者が「中央の学者」と「郷土史家」の間のどこに立ち位置を取るのか、等についての言及が欲しかった。本文中では無理でも、例えば巻末の執筆者一覧で述べるなどの工夫があっても良かったのでないか。本書の執筆者一覧は、著者の現職だけを素っ気なく記しているが、単行書は雑誌と異なり、記載項目を自由に決定することができるのであるから、ここを充実させても良かったように思う。

それはともかく、著者たちの熱心なフィールドワークは、今後も続々と成果を輩出し得る十分なデータを得ていることをうかがわせるものであった。若き著者たちの今後の研究が実りあることを大いに期待したい。

（あなみ　とおる　江戸川大学）